

宮城県 南三陸町 女川町 訪問 報告

今回、12月の理事会でもお話をさせていただきましたように、直接両町に義捐金を持参させていただきました。平成26年2月14日から16日にかけて訪問させていただきました。雪が舞い、この冬一番の大雪の寒い時期でございました。

まず南三陸町に伺いました。南三陸町はほとんどが更地と言っていいほど、建物がありませんでした。やっとがれきの処理が終わり、更地の整備が始まったとお聞きいたしました。計り知れないほどの工事車両が動いておりました。しかし、岸壁や大きな建物はまだ震災当時の被害にあったままの状態のところも沢山ありました。特に南三陸町の拠点、町役場〈防災対策庁舎〉では職員約30人は屋上に避難されたのですが屋上の床上約2メートルの高さまで津波が押し寄せ、度重なる津波によって庁舎は骨組みだけとなりました。屋上のアンテナにしがみつくなどして波に耐えた佐藤仁町長ら11名は生還されたものの庁舎に詰めていた他の職員や住民は津波で流され犠牲になりました。防災スピーカーで、避難指示を津波到達時までアナウンスを続けた女性と男性も含まれているとお聞きしました。鉄鋼の枠だけが無残に残り、花束が供えられていました。その鉄骨の枠の周りには何もありません。残った鉄骨は、残った人々に何か訴えているようにも感じました。改めて津波の恐ろしさを感じ胸が痛みました。



そんな中、町長様を始め、教育長様が町をあげての復興に取り組まれているお姿に敬服いたしました。

訪問をさせていただきました志津川中学校では、生徒会誌「松籟」を拝読させていただきました。生徒会長をはじめ、生徒の皆さんが南三陸町を誇りに思い、志津川中学校を故郷と思っている事が津々と伝わってまいりました。生徒全員が将来の夢をしっかりと見つめ、力強く書いていること、素晴らしく思いました。



被災されていろいろなご事情がおありであるにも関わらず、町長様や教育長様を始めとし、先生方や、保護者様、地域の方々が三位一体で、南三陸町の未来を担う生徒たちを大切にされておられること、とりわけ、交流をさせていただいた吹奏楽部顧問、及川先生の愛情いっぱいのご指導のもと、吹奏楽部の皆さんの心温まる演奏をお聞かせていただいたことは、大変嬉しく感動いたしました。

南三陸町を後にし、389号線で女川町へ向かいました、海岸線や山道を走りました。その道筋には、やはり地震や津波の大きな傷跡がありました。途中車載ナビゲーションの地図には学校等があるのですが、更地になっているところもありました。声がつまりました。だんだん気持ちが萎えてきているのがわかりました。



女川町に入ると、又愕然といたしました。更地になっているところが大半で重機も沢山あり復興に向けて動き出しているのはわかりましたが、津波によって横倒しになった建物が幾つも有りました。岸壁が崩れた跡など、手つかずのところも沢山ありました。車載ナビゲーションの地図を頼りに役場を目指しましたが、そこには何もありませんでした。役場が津波によって流されていたのです。副町長の阿部様に連絡を取ったところ、山の手に移転し仮設の庁舎になっているとお聞きし、向かいました。阿部様とは昨年11月16日、西宮市「女川さんま収穫祭 in リゾ鳴尾浜」でお会いしていましたので、3か月ぶりの再会となります。そこでまず第1の訪問先である、女川中学校をご紹介いただき向かいました。



女川中学校では小野寺恵先生の熱いご指導のもと、1, 2年生総勢9名の部員が一生懸命に練習をしておられる姿に大変心打たれました。スクールバスで40分もかかって登校している生徒さんもおられると聞き、その熱心さにも感心いたしました。気持ち良い挨拶と返事に爽やかさとやる気を感じました。

また、顧問の小野寺先生から、震災直後からのお話を伺いました。ここでも大変胸が痛みました。そして、千年後の君へ「いのちの石碑」第1号を学校に建立されたお話も伺いました。女川中3年生が町内21の浜の津波到達点より高い場所に石碑を建てる「いのちの石碑プロジェクト」を立ち上げられ実行されたと伺いました。生徒の皆さんが主体的に行動を起こすことによって物事が動き、それを知った多くの人に支えていただいて結実したことは本当に素晴らしいことだと思います。この事はニュースにもなりご存知の方もいらっしゃると思います。





これは、ここ女川の町を愛し誇りに思っている証しだとも強く感じました。これからの、女川町を担う若者たちの活躍を願ってやみません。今回訪問させていただいた両校の生徒の皆さん一人ひとりには、きっと、まだまだ計り知れない、やるせない思いが心の奥にあることでしょう。しかし、家族の想いや、お世話になった方々に感謝をしつつ、しっかりと前を向いて生きていくという想いには心打たれました。

また、あいにくの空模様の中、ご多忙中にも関わらず私たちを町内へ案内していただきました、阿部一正副町長様にも深く感謝申し上げます。庁内で復興状況と、復興計画をお話ししていただきました。阿部副町長様の復興への熱き想いに私たちはとても胸を打たれました。



3階建てや4階建てのビルが横倒しになっている光景には唖然といたしました。お話を聞くと、倒れたビルの向きが違うそうです。押し寄せた時の波と、引き波と渦を巻いていた時の波で、方向がまちまちなのだそうです。20数メートルの高台にある病院の1階までにも津波が押し寄せたお話には、衝撃を受けました。しかし、地元の方々は力強く生きておられました。昼食をとったお店には、活気があり沢山の方々の色紙が印象的でした。また、復興商店街もあいにくの天気でお客さんはまばらでしたが、明るい笑顔と「絶対に負けない、」という意気込みが伝わりました。そのお店には震災前の町の風景の写真と震災後の写真が飾られていました。写真を見比べました。ほぼ壊滅の状態でした。言葉がでませんでした。しかし、今ここに、笑顔で頑張っている姿を拝見し、逆に元気をいただきました。「がんばっぺ 女川」という合言葉が町中にあり、女川の人達のつながりや絆を一層深めておられるとも思いました。

がんばっぺ女川!
負けぬと宮城! 負けぬと津波!

最後に、大川小学校跡地に向かいました。北上川沿いを車で走らせていると、そこはがれきがやっとなくなり、更地になったところに、無残な姿の大川小学校が目の前に現われました。

地震発生後およそ 50 分経った 15 時 36 分頃、三陸海岸・追波湾の湾奥にある北上川河口から約 5km の距離にあった学校です。そこを津波が襲い校庭にいた児童 108 名中 78 名と、教職員 13 名中、校内にいた 11 名のうち 10 名が津波の犠牲となったのです。

あの日の事がある記事から抜粋すると、「地震直後、校舎は割れたガラスが散乱し、余震で倒壊する恐れもあった。教師らは生徒を校庭に集めて点呼を取り全員の安否を確認したのちに避難先について議論を始めた。学校南側の裏山は有力な避難先であったが、急斜面で足場が悪いことから、生徒らが登って避難するには問題があるとされていた。約 200m 西側にある周囲の堤防より小高くなっていた新北上大橋のたもとの三角地帯も避難先候補となり、裏山へ逃げるといった意見と、老人も含まれていることを考慮して三角地帯にすべきという意見が教職員の間で対立し、最終的に三角地帯に避難することになり移動を開始した」そうです。

その直後、堤防を乗り越えた巨大な津波が児童の列を前方からのみ込みました。列の後方にいた教諭と数人の児童は向きを変えて裏山を駆け上がり、一部は助かったが、迫りくる津波を目撃して腰を抜かし地面に座り込んで避難できない児童も居たそうです。家族が車で迎えに出向き、独自に避難した生徒は助かった。避難先として選定した三角地帯も標高不足で津波に呑み込まれており避難が完了していても被害は避けられなかったです。その大川小には犠牲者を慰霊するために制作された母子像が設置されていました。

私たちが慰霊させていただいたときも、何台かの車が止まっており、母子像に手を合わせておられる方がおられました。裏山がすぐにあるのですが……。胸が痛み声もでませんでした。壊れた窓からは、ついさっきまで、児童がいた様子がわかる掲示物や教室が見えました。なんとも言えない重苦しい気持ちになりました。

復興は進んでも、震災に遭った方々の心の傷は深く一生残ります。このことは阪神淡路大震災でも同じ事が言えます。人の命の尊さ、重さはやはりはかりしれないものがあると今一度考えさせられました。

丸 3 年が経とうとしている今、更地になり整備はされているようにも見えますが、復興はまだまだであることを目のあたりに致しました。

私たちができることはほんの小さなことかもしれませんが、今回この状況を目のあたりにして復興支援は是非とも継続しなければならないと、石井事務局長ともども強く

感じました。一人でも多くの方に今回見た事、聞いた事をしっかりと自分の言葉で伝えていくことが大切だと思っています。今回の南三陸町、女川町をはじめ各地を訪問させていただきましたことを契機として、音楽を通じてより一層交流をしていかなければならないと強く感じました。9月には必ずや西宮市吹奏楽連盟から吹奏楽団を派遣し音楽交流並びに復興支援をする決意をいたしました。

今後も、何かとご協力やお願いを申し上げることがあるとは思いますが、何とぞよろしく願いいたします。

最後の最後になりましたが、被災された方々が安心して生活ができ、一日も早く復興されますこと、そして、女川町、南三陸町は勿論の事、全被災地が発展されますことを心よりお祈りいたします。

平成26年(2014年)3月8日

西宮市吹奏楽連盟
理事長 池上 達
事務局長 石井健昭